

5/17 福井

コロナクラスター 県内4施設で発生 介護現場 独自に備え

感染想定 訓練や検査

県内の介護施設で、新型コロナウイルスのクラスター（感染者集団）がこれまで4例発生した。施設入所の高齢者へのワクチン接種が県内で順次進んでいるが、変異株中心の第4波の拡大もあり、各施設は警戒を強めている。面会制限や職員の間外往来自粛など従来の「ウイルスを持ち込まない」対策の徹底に加え、入所者の感染を想定し独自の訓練や検査を行う施設もある。

（玉村勇樹）

光道園朝日事業所（越前町朝日）は、高齢者福祉施設と障害者支援施設に計約350人の入所者がいる。ワクチン接種を希望した高齢者の入所者と介護職員計271人の1回目の接種が7日に終わるが、岸松総務課長（45）は「100%感染しないとは限らない。対策を練る」と話す。

入所者の感染に備え、他の入所者と居室や動線を分ける「ゾーニング」のシミュレーションを昨年5月から職員に行っている。岸松総務課長は「対策には限界がある。ウイルスが入るこ



65人が入居する介護老人福祉施設「こしの清流」（福井市清生町）は、県独自の感染拡大注意報が発令された翌日の3月31日以降、同日から解禁していた家族からの面会を再び禁止した。加えて、職員70人に大型連休の前後に1回ずつ、市販の抗原検査キットを使って検査を行っている。長谷川弘光施設長（53）

光道園朝日事業所 同事業所提供

感染拡大注意報が発令された翌日の3月31日以降、同日から解禁していた家族からの面会を再び禁止した。加えて、職員70人に大型連休の前後に1回ずつ、市販の抗原検査キットを使って検査を行っている。長谷川弘光施設長（53）

職員ケアにも知恵

新型コロナウイルス対策に細心の注意を払いながら入所者と接している施設職員の心身の負担は大きい。県内の現場では、職員のケアにも知恵を絞っている。

施設内にウイルスを持ち込まないため、職員は休日も生活が厳しく制約される。ある施設の管理職は若いスタッフも多く、モチベーションを高く上げていくかは感染対策と同じくらい重要」と打ち明ける。出前弁当を用意して施設内で職員の歓送迎会を開いたり、職員の昼食を豪華にする機会を設けたりして、職場の雰囲気を守る工夫を重ねている施設もある。

は、介護施設での感染が報道されるたび、朝礼で職員に気を引き締めるように呼びかけている。入所者数人が相部屋のため、感染拡大への懸念は強い。「コロナ禍から1年以上経過してまひしている部分もある。人ごとではないと、しつこ

いくらいに言っている」

外部のボランティアスタッフの受け入れも取りやめており、人手不足は否めない。長谷川施設長は「入所者が感染しても、押すわけにはいかない。感染者が出たら、在宅型のサービスは止めるしかない」と話す。

「ライフ小野谷」は2月から、学識経験者や精神保健福祉士を招いた職員の面談を実施。上司は同席せず、自由に不安や不満を打ち明けられる機会を設けた。面談結果を参考に職員が気持ちに合わせた声掛けや、研修を通じたスキルアップの機会を提供を、やる気につながるよう試みている。

感染対策で入所者らの外出機会や施設内の催しが激減している一方、職員が入所者と向き合って介護に集中できる時間が減っている側面もあるという。サンライフ小野谷の谷口和正事務長は「自分たちはいま最も必要とされているエッセンス、スキル、経験や精神保健感を新たにしているスタッフも多い」と話す。

これまで機会が少なかったという介護施設同士の情報交換も始まっている。4月中旬には、あわら市を中心に20施設が参加しオンラインで研修会を開いた。クラスター（感染者集団）が発生した施設の職員も参加し、課題やアイデアを共有した。発起人の谷川真澄さんは「県内各地でも連携を図るきっかけになれば」と話している。

（高島真、玉村勇樹、東村淳悟）